日番谷隊長の女難２

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日番谷隊長の女難２

【Ｎコード】
Ｎ０７０３Ｅ

【作者名】
切香

【あらすじ】
日番谷冬獅郎が脱走した？日番谷と共に姿を消した「あるもの」に、女性死神たちは悲鳴を上げる。幻の「日番谷隊長の袋とじ」は日の目を見るのか？逃げ続ける日番谷の運命は？オールキャラ、ドタバタなライト・コメディ。

1．　日番谷隊長の失踪

その事件は、なんの変哲もない朝から始まった。
チュンチュン・・・賑やかに鳴き交わしながら、雀が桜の枝を揺らし、飛び立った。
つい数週間前には、そのピンク色の花弁で死神たちを楽しませた桜も、今は透き通るような緑に、その姿を変えた。
春の朝の、柔らかな風のもとで、まどろむように葉が揺れている。

「ふぁぁ・・・」
その葉を見ながら、一人の死神が、両手をうーんと上に伸ばして、派手にアクビをしていた。
給湯室の窓を開け、外のさわやかな空気に、ちょっと目を細める。

ここは、十番隊隊舎の中でも、執務室に最も近い給湯室である。
ガスコンロにかけられたヤカンが、しゅんしゅんと湯気を噴いている。
「ふんふーん・・・」
鼻歌を歌いながら、ヤカンには目もくれず、傍に置かれた鏡に覗き込んだ。

年のころ、１５・６歳に見える。
そばかすが頬に散り、ちょっとばかり鼻が上を向いているが、陽気な彼女の気質らしく、常に微笑んだような口元は中々に愛らしい。
死神にしては珍しい、明るめの茶色の瞳、そして栗色のストレートの髪が、自慢だった。

死覇装の懐から取り出したルージュを唇に引くと、にこーっと微笑んで見せる。

湯を沸かしてるどころじゃない。
ここは、ひそかに女性死神たちの「働きたい職場」で、常に5本の指に入る場所なのだ。
湯が沸いたところで、お茶葉の入った急須に湯を注ぎ、ぴったり3分待って、湯のみに茶を注ぐ。
我らが隊長殿は、薄すぎも濃すぎもしない、絶妙なタイミングで入れられた茶がお好みなのだ。

「茶、よし！甘納豆、よし！！」
誰もいない給湯室で、指差し点検。
最後に、鏡の中を覗き込む。
「あたし、よし！！」
茶がなみなみと注がれた湯のみが2つ。そして、甘納豆を小皿にひと盛り。
これで、今日もあの隊長に会える。
そう思えば、自然と隊首室に向かう足取りも弾むというものだ。

「おっはよーございます、日番谷隊長！！」
バーン、と隊首室の戸を開け放ち、大またで室内に踏み込んだ・・・
途端。
「尊（みこと）、あんた。言ってんでしょ？ノックくらいしなさい」
蓮っ葉な物言いが、上から飛んできて。尊と呼ばれた少女は、首をすくめる。
「すいませーん、松本副隊長」
頭を下げながら見ると、窓際に佇む、すらりとした影が目に入った。
――　副隊長が、立ってる・・・
長椅子にいつも寝そべっているか、いいとこ座っているこの副隊長の立ち姿は、新鮮に見えた。

「・・・て、あれ？日番谷隊長は？？」
尊は、茶と甘納豆を載せた盆を持ったまま、きょろきょろと隊首室内を見回した。
「まだ来てないわよ」
「なーんだ！！」
途端に、気の抜けた声を鼻から漏らして、尊は盆を隊首席の上に置いた。
「髪のセットも、お化粧も完璧だったのに！くずれちゃう」
「あ・ん・た。何しに働いてんの？」
「玉の輿」
尊は何のためらいも衒いもなく、即座に答える。
さすがの乱菊が絶句するほどの、素早さで。

日番谷冬獅郎。
彼女・・・いや、彼女達女性死神が、憧れてやまない男。
少女漫画から抜け出してきたような美形。エリート中のエリート。
金持ち。隊長。
そして、苦労知らずと思いきや、流魂街出身で、ちょっと生意気盛りなところがたまらない！

「あぁ、彼を落せたら、死神なんておさらばよ！」
「声でてるわよ」
パン、と隊首席の上に置かれていた帳簿で、乱菊に頭をはたかれた。
「あのねえ。言っちゃなんだけど、隊長はそういう面では、見た目どおりのお子様なの。
はっきり言って望み無いわよ？」
「そんなことないです！
だって今だって、一日何度も、お茶汲みで出入り許されてるの、あたしだけじゃないですか！」

――「ありがとう、城崎（きのさき）」
そう言って穏やかに見つめてくる、蒼碧の瞳・・・
「日番谷隊長、ラヴ！」
「聞け」
乱菊が、帳簿でゴリゴリと尊の頭をこすった。そして、帳簿を上に持ち上げると・・・
「きゃー、静電気でセットした髪が！・・・イジメだわ、イジメ！！」
「城崎尊！アンタが茶汲みを命じられてるのはね・・・」
「命じられてるのは？」
「アンタが、十番隊末席だからよ！」

末席。
それが示すのは、２００人を越える十番隊士の中で、尊が「ドベ」だということを示す。
「名前は立派なのに、こんなんじゃ、親もガッカリよねえ・・・」
同情するように、乱菊は尊を見下ろした。
尊の身長は１５０センチほど、乱菊は１８０センチに迫る長身のため、大人と子供のように見える。

――　隊長も、何でこんなお転婆娘、隊首室に出入りさせてるのかしら・・・
ドベの称号はダテではない。
きっと何かの偶然で受かってしまったのだろう、とひと目で思わせる霊圧の低さ、頭の悪さ。
とても、危険な戦いなどに出せるシロモノではない。
それなら、茶でも汲ませておくのが賢い選択なのかもしれないが・・・

「頭も、腕も、胸も足りないわ・・・」
「む、むね・・・」
がっくりとうなだれる尊を見て、乱菊もまた、うなだれる。
その３つをけなされて、なぜ胸が一番ショックなのか。
「あんたねえ。隊長に認められたきゃ、まずちゃんと働きなさい」
こんなことを言うなんて、なんて不本意なんだろう。
でも、尊を見ていると、自分のコケが生えた上にカビまで生えた「勤労意欲」が、ゴトリと動きそうになるのだ。

に、しても。
その日番谷は、どこに行ってしまったのか。
日番谷が隊首室に現れるのは、業務時間が始まる９時よりは、いつも３０分は早い。
９時ギリギリで現れる乱菊が先になるなど、前代未聞の出来事だった。
「どうしたってのかしら」
盆から湯飲みを取り、口元に運びながら、ちらりと隊首机に目をやった。

ブーッッ！！
唐突に茶を噴出した乱菊を見て、慌てて尊が跳び下がる。
「ちょ！ちょっと松本副隊長！きたな・・・」
「それ！それ！！」
乱菊は、床にヒラリと落ちた一枚の紙を指さして、絶句した。
口元が「ヒエー」とでも言いたげな形のまま、固まっている。

――　こんな面白い・・・もとい、慌ててる副隊長、初めて見た。
その紙を何気なく拾い上げ・・・ピタリ、と尊の動きが止まった。
「ひえええ！何！これ何！！ドッキリですか！！」
二人して、その紙を覗き込む。

その紙には、見覚えのある字で、こう書かれていた。

「探さないでください。　――　日番谷冬獅郎」

2. 証言其の一　S・Kの場合

「へっ？日番谷くんが、いなくなった、だぁ？」
京楽が、彼に似合わぬ頓狂な声とともに、自分の前に立つ、栗毛の少女を見下ろした。

「しっ！京楽隊長、声が大きい！」
場所は真央霊術院。
死神見習いたちが学ぶ学校だが、ここに隣接する図書館には、現役の死神もよく訪れる。
遠くの本棚で本を見ていた七緒が、チラリとこちらに視線を投げるのが分かり、京楽も声を潜めた。

「でも、失踪とは限らないんじゃない？まだ」
そんな京楽に、尊はため息をつき、懐に仕舞っていた紙切れを見せた。
「『探さないでください』・・・」
それを読み上げた京楽が、カクン、と首を前に倒した。
「自己申告つきかい。失踪の線で決まり、だね」

「探さないでくださいって、そりゃ隊長いなくなったら探しますよ。それだけじゃなくて隊長はあたしの、そりぃゃぁぁあ大切な・・・」
「だよねぇ。禁じられた隊長と部下の恋。素敵じゃぁないか・・・」
互いに思い浮かぶものがあるのか、あさっての方向に目を向ける京楽と尊。
それを、周囲の死神たちが、気味悪そうな顔で見ているのにも気づかない。

「こほん！」

七緒のわざとらしい咳払いに、ハッ、と二人は我に返った。

「で。なんの話だったっけ」

「ええ。松本副隊長から、足取りをこっそり追ってくれって言われて」

「そりゃ、厄介だね」

京楽と尊は、そろってため息をついた。

「あの。聞いたんですけど・・・昨日日番谷隊長、隊首会に遅刻したんですって？

もしかしてそれがショックで」

「あぁ」

京楽は、ちょっとだけ視線を泳がせ、顎の無精ひげを捻った。

「まぁねえ。でも、そんな気にしていたとは思えないんだけどね」

それは、日番谷が失踪する前夜、夜９時に近い時間帯である。

一番隊隊首室には、微動だにしない山本総隊長を筆頭に、ずらりと隊長たちが並んでいた。

「それでは、解散！・・・日番谷隊長は、残るように」

「・・・はい」

バラバラと解散する他の隊長たちが、山本総隊長に歩み寄る日番谷の姿を、チラリと見やる。

「ハッ！」

その中で、毒々しい笑声を放ったのは、十二番隊隊長、涅マユリだった。

「全く、隊首会を忘れて、一時間も遅刻するなんて尋常じゃないヨ。特に、藍染の反乱後、この忙しいときにネ。隊長としての自覚に欠

けるんじゃないかネ」
「・・・涅隊長」
それを、山本総隊長が視線で制する。
そして、自分の前に無言で立った、銀髪の少年を見下ろした。
「お主らしくもない。どうしたのじゃ」

山本総隊長が知る限り、日番谷が会議に遅れるなど、これまでに一度も記憶に無い。
明晰な頭脳、一分の隙もない理論展開には、山本総隊長自身、心中感服していたものだが。
「遅刻」などという間の抜けた失敗をするとは、思いにくいのだが・・・事実だから、仕方ない。
「いえ。特に理由はありません。申し訳ありません」
「いつもみたいに理路整然と、言い訳すればいいんじゃないのかネ」
隊首室を去ろうとしていた浮竹が、眉間に皺を寄せて振り返った。
なぜだか理由は分からないが、涅はスキさえあれば日番谷に噛み付く癖があるのだ。

「僕にまーかせて」
その浮竹の前にスッと手をやり、京楽は退出しかけた隊首室へ足を戻した。
さらに、何か日番谷に向かって言い募っている涅に、大股で歩み寄る。
「言ってくれるねぇ、涅くん。研究に没頭して隊首会を欠席したの、今まで何度あった？」
「あぁ？横から口をはさむんじゃないヨ」
涅の口調が剣呑にとがった。
横から口を出してるのは君だって同じじゃない、と京楽は心中思う。
「私は技術開発局も兼任している身なのだ。忙しいのだヨ」

「そう。そして、隊首会のことをどう言ってるか、聞いてるよ？
この忙しいのに、隊首会なんて――」
出ていられるか、とつなげる前に、ごほん、と涅が咳払いをした。
「何を言っているのだね？私は・・・」

「もうよい」
そのやり取りを遮ったのは、山本総隊長だった。
「今後は気をつけられよ、日番谷隊長」
「はい。・・・失礼します」
日番谷は、顔色ひとつ変えずに頭を下げると、スッと3人に背中を向ける。
その背中を、京楽はゆったりとした足取りで追った。

「やっちゃったね」
一番隊の中庭に出たところで、待っていた浮竹が、日番谷を見ると微笑んだ。
藍染達三隊長が精霊廷を裏切り、虚圏へ姿を消して、早3ヶ月が経った。
初めの打撃からは立ち直ったが、隊長格の多忙さは、いまだに尋常ではない。
いまだ緊急体制が敷かれる中、隊首会に無断で遅刻するなど、処罰対象になってもおかしくはない場面だった。

「あぁ」
日番谷はうなずくと、かすかに肩をすくめて、足取りを緩めた。
その隣に、追いついた京楽が並ぶ。
日番谷の顔は、一見殊勝に、それなりに反省しているように見える。
だが・・・
――　嫌味が堪えるようなタイプじゃないね。
大方、涅が今何を言ったかなんて、ほとんど覚えていない、という

より聞いてもいないだろう。

日番谷に悪口を言うのは、痩せた人間に太っていると言うのと同じだ。
本人は自分が太っているなんて夢にも思わないから、まるで堪えない。
それが意味するのは・・・絶対的な、自信。
不遜だとか、生意気だとかいう称号を抱いている理由だが、ここまでくると小気味よい。
だからこそ、涅も噛み付きがいがあるのだろうが。

はるか昔、そのマッド・サイエンティスト振りが災いし、「死神不適合者」として幽閉されていたという黒い噂を持つ涅。
彼が、埃ひとつ立たない神童、日番谷を実験体に狙っている、という噂は、灰色どころかクロに近いと京楽は思っている。
そして、日番谷自身、おそらくそれにとっくに気がついている。
隊長職を追い落とそうと、虎視眈々と狙っているのを知っていて、無視する理由はわからない。
返す刀を準備しているのか、それとも、更に予想だにしない一手を用意しているのか。
その答えは、誰にも杳として知れない。

隊長なんて、腹黒く強かな奴、更に言えば「嫌な奴」じゃなければやってられない。
それは、何百年も隊長の座についてきた自分が、一番よく知っている。
――　今も、何を思ってるのかね、この天才児さんは。
そう思って京楽が日番谷を見上げたとき、日番谷と目があった。
相変わらずの無表情のまま、その唇が言葉をつむぐ。

「さっきは、ありがとう」
「へっ？」
思いもよらない言葉。
京楽は、おそらく相当意外そうな顔をしたのだろう。
日番谷は、一瞬ちょっと困った顔をした。
「こういうときは礼を言うものだと習った」
誰に。
そう聞こうとしたときには、日番谷はもう先へ行っていた。

「どう・・・いたしまして」
横に並んでそう言うと、日番谷はあどけない表情で、ふぁ、と小さくあくびを漏らしていた。
自分は、いまだ日番谷少年のことを、全然わかっちゃいないのかもしれない。

「お疲れ様です、隊長方！」
一番隊正面門の前に整然と立ち並んだ守衛たちが、3人の姿を見るなり敬礼した。
右に浮竹、左に京楽、中央に日番谷。
隊長格が3人も並ぶと、ただ何気なく歩み寄ってくるだけでも、壁が迫ってくるような圧迫感がある。
意識しなくとも、気づけば跪いているほどの。

「開門せよ！」
リーダー格の声に、すばやく立ち上がった守衛たちが、門を押し開けた。
「ご苦労」
浮竹がニコリと笑い、京楽が軽く手を上げ、日番谷はちらりと流し

見た。
そして、門の外に足を踏み出した瞬間。
「きゃっ、日番谷隊長だわ！！」
その場の厳粛な空気に、黄色い・・・というよりピンク色の声が飛び込んだ。
――　あ？
3人は三様に、微妙な表情を作る。
「なんか、今声がしたかい？」
「気のせいじゃないスか」
日番谷が浮竹の言葉を流したとき。
「やーん、目が合っちゃった！」
壁のそばに隠れていた女性死神が、頬を赤らめて駆け去った。
「・・・今、目が合ったの誰だい？」
「俺じゃねーよ」
「僕かなぁ？」
浮竹の問いに、日番谷と京楽が同時に返した。

――　何なんだ、いったい・・・
歩き続けながら、3人はまったく同じことを考えていた。
一ブロック進むごとに、あちこちから熱っぽい視線を感じる。
誰だか知らないが、女がささやき交わすような声も。
「前も、こんなことあったような気がするね」
ぽん、と浮竹が手のひらを打った。とたんに、日番谷は足を緩める。
「どうしたんだい？日番谷隊長」
「俺は、ここで失礼する」
「えー？どうしたんだい。この後雨乾堂に誘うつもりだったのに」
「あぁ、またの機会にな」
日番谷が踵を返した時だった。

しゅん、とその眼前に、日番谷の知らない女死神が現れた。
「明後日、楽しみにしてますから！！」
そういうと、きゃっ、と照れたように笑い、またその場から姿を消す。

「・・・あぁ、こりゃ間違いないと思うね」
京楽が、ひとつ頷いた。そして浮竹と顔を見合わせる。
「『日番谷隊長の寝顔事件』！」
「やめろ・・・」
日番谷が、病人のような声を出して肩をとした。

「日番谷隊長の寝顔事件」。それは、約半年前の精霊廷通信にて明るみになった。
平たく言えば、その時の精霊廷通信の付録に、松本乱菊が隠し撮りした、日番谷の寝顔の写真がついてきたのである。
いつもは上げている髪も下ろしたままの、それはもう無邪気な顔で。
それを見た瞬間、机に突っ伏したまま動かなくなるほど日番谷を打ちのめしたと言う。

立ち直った日番谷は、すぐさま回収命令を出したが、何においても輝かしい業績を残した彼にしてみれば、唯一の失策だっただろう。
なぜなら、女性死神たちは写真を奥深くしまいこみ、日番谷がいかに怒ろうが、それを返そうとはしなかったからである。
そして、その付録の存在は数日前から女性死神の中では話題になっており、今とまったく同じ光景が繰り広げられたのだった。

「寒気がする」
不意に日番谷がそう言うと、足を速めた。
「日番谷くん？」
「雛森のところに行ってくる。あいつなら何か知ってるかもしれね

え」
こういう時に頼りになるのは、雛森しかいない。
こんな夜更けに？とは聞かない。
日番谷と雛森は、幼いころを共に暮らした、家族のようなものだと聞いていた。
「それじゃ、失礼する」
「おやすみー」
浮竹と京楽は、夜道に消えていく日番谷の背中に向かって、声をかけた。
それが、この2人が失踪前の日番谷を見た最後になった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーー
補足。
「藍染達三隊長」って誰ですか、というコメントが来ました。
藍染の名前は達三じゃなくて、そうすけ（字は忘れた）ですね。
「藍染達、三隊長が精霊廷を裏切り～」が正しいです。

面白いのでそのままにしておきますw

3．　証言其の二　　M・Hの場合

「『探さないでください』・・・なんでー？」
尊から紙を手渡された雛森は、穴が開くほどその紙を見つめた後・・・盛大にため息をついた。
――　かわいい人・・・
チラリ、とその顔をうかがい、尊は心中、ため息をつく。

雛森桃。
五番隊副隊長であり、日番谷冬獅郎と一つ屋根の下で暮らした、幼馴染。
日番谷ファンの女性死神にしてみれば、垂涎もののポジションにいた女。

読書が趣味で、どこか夢見がちな微笑を、いつも唇に乗せている。
黒目がちの大きな瞳は、後輩の女から見てもあどけない。
その一方で、戦いの場になると、鬼道の腕前だけ取れば隊長にも匹敵する。

反乱時に怪我を負ってしばらく入院した際、日番谷が3日も空けずに通っていたのは記憶に新しい。
久しぶりに見る雛森は、少し痩せたようには見えたが、それ以外は以前と変わりなく見えた。
――　手ごわいライバルだわ・・・
「末席」という自分の目下の状況を棚にあげて、尊は炎を燃やした。

「それで、失踪の理由よね・・・」
「えぇ。昨日の夜、日番谷隊長は、雛森副隊長のところに来られたんでしょうか？」

「ええ、来たわよ」
「何か話したんですか？いなくなっちゃった原因に、心当たりありませんか？」
雛森は、それを聞くと、しばらくの間地面に目を向けて記憶を探っていたが・・・すぐに、顔をあげた。
「・・・たぶん、理由はあれよ」

鏡台の前にぺたんと座った雛森は、鏡に映る自分の姿を見ながら、髪を櫛で漉いていた。
――　ずいぶん、伸びてきたわね・・・
戦いに、長すぎる髪は邪魔になる。
それでも切らなかったのは、「あの人」が長い髪が好きだったから。
今となっては、その好みさえ本当だったのか、わからないけれど。
確かめることも、もうできない。

――　ぱらり。
後ろで響いた小さな音に、雛森の心臓がドキリと跳ね上がった。
鏡に映りこんでいたのは、小さな銀髪の少年の姿。
だらしなく畳に腹ばいになり、畳についた頬杖をついてた日番谷が、「精霊廷通信」の記事を無心に読んでいた。
その何気ない風景が、雛森を日常に引き戻した。
いつまでも、落ち込んでる訳にはいかない。
あれほどのことがあったのに変わらず傍にいてくれる、この子のためにも。

「髪、切ろっかな」
雛森はわざと、あっけらかんとした声で言うと、立ち上がった。
「もー、隊首羽織着たまま寝転がって。シワになるでしょ」

あー。
日番谷は、明らかに聞いてないと思われる声で返した。
「ホラ、羽織脱いで！」
「うっせーな」
めんどくさそうに顔をしかめる日番谷から、羽織を無理やり脱がせると、丁寧に畳んだ。
傍のちゃぶ台の上に置かれた茶と甘納豆のうち、茶は減っているが、甘納豆のほうは手付かずだった。

「食べないの？」
「ああ」
精霊廷通信に目を落としたまま、日番谷はすぐに返した。
その肩が、少しだけ痩せたような気がして、雛森は眉をしかめる。
藍染が抜けた後の隊長業務を、ずっと日番谷が肩代わりしている、と噂に聞いていたが、本当なのだろうか。
藍染の仕事の速度は早く、フォローする雛森でさえ、これだけの量の仕事が藍染のどこを通り抜けて、消化されていくのか不思議だったほどだ。
まさか・・・全て藍染の仕事を引き継いだ、訳ではないだろうけど。

「晩御飯、ちゃんと食べたの？」
「・・・食ってねえ」
「何か作ろうか？」
「いらねー。お前の料理はまずい」
「もぅ！ワルクチばっかり言うんだから！そんなだから、大きくなれないのよ」
「うっせえよ」
ため息混じりに返した日番谷の背中を、雛森は意外な思いで見つめた。

――　おかしいな。
いっつもだったら、食って掛かってくるのに。
日番谷に「小さい」とか、「大きくなれない」とか、身長の低さについてあれこれ言うのは、絶対のタブーなのだ。
反応が面白くて、つい何度も言ってしまうが。

――　オトナになってきたのかな。
それはそれで、ちょっとだけ寂しい。
雛森は、日番谷の隣に腰を下ろすと、本に目をやる日番谷に視線を落とした。
読んでいる記事は、涅マユリ連載の、「脳にキく薬」。
涅と日番谷は決して仲がよくないと聞くが、日番谷はこの記事を、前からよく読んでいた。
様々な怪しげな薬品とか、悪趣味な実験が延々と載っているだけの、雛森は必ず読み飛ばす連載だが、元々勉強好きの日番谷には、ちょうどいいのかもしれない。
昔から、雛森が小説を読む隣で、日番谷は科学とか医学とか、学術的な本ばかり読んでいた。

そんなことより・・・雛森は、甘納豆をつまみながら、日番谷の顔を凝視する。
――　睫毛、長！
伏せられている分、余計睫毛の長さが目立つ。
銀色の睫毛に縁取られた、深い蒼碧の瞳。
意外と長めの、銀色の襟足が、真っ白い首筋にかかっている。
頁をめくる指は、女よりは逞しいけど、男にしては細くて、そして長い。
こんな言い方したら何だけど、最近の日番谷は、ちょっと凄いほど、色っぽいのだ。

――　あたしを色気で上回るのは、隊長だけよ！
最近、乱菊がそう言っていたのを思い出す。
女性死神たちがキャーキャーいうのは、外見でも、才能でも、地位でも金でもない。
なんというか・・・女をひきつけてやまない、フェロモンみたいなものが日番谷にはあるのだ。

――　女が出来たんじゃない？
そういう噂を何度も聞いたが。
――　ううん、絶対、そんなワケない！
日番谷は昔から、恋愛だのには人一倍疎いのだ。
本当は・・・弟みたいなこの少年を、もうちょっと手元に、置いておきたいだけなのは、自分でも気がついているけど。

「で」
雛森は、さらに頁をめくろうとした日番谷を遮り、頁の上に指をついた。
「どうしたの」
「・・・いや」
雛森にまっすぐに見つめられ、一旦雛森を見返した日番谷が、気まずそうに視線を逸らした。
この激務を縫って、わざわざ自分のところに来たのは、まさか精霊廷通信を読破するためじゃないだろう、と雛森は思う。
「えーと」
さらに珍しくも、言いよどむ姿に、雛森はますます興味を引かれる。

「なーによ？」
「お前、絶対笑う」
「笑わないわよ」

「いや、笑う」
「笑わない。絶っ対、笑わないから。約束する」
押し問答の末、二人が見つめあう。
しばらく頑固に黙っていた日番谷が、しぶしぶ、口を開いた。
「女が、俺を見るんだ」
「――――・・・・」
一瞬の間をおいて。
「あはははは!!」
雛森は、そっくり返って爆笑した。

「てめっ・・・話し聞け!」
さっきまでのぐうたらぶりとは打って変わって、素早い動きで起き上がった日番谷が、雛森の口をバンッとふさいだ。
「あはは・・・うっ?」
口を押さえられた途端、雛森が変な声を漏らした。
「つ・・つまった!甘納豆が喉に・・・」
「はぁ?」
喉を押さえる雛森の背中を、慌てた日番谷がバシバシ叩く。

「いたっ!痛い!痛いって!もう大丈夫・・・」
ぜぇ、ぜぇ、と息を付く雛森と、日番谷が見詰め合う。
「ご、ごめんね。日番谷くん。あたしにはレベル高かったわ」
「だ・ま・れ」
「知ってるわよ、あたし。なんで日番谷くんのこと、みんな噂してるか」
「何か知ってるのか?」
聞きたいような、聞きたくないような。
そんな微妙な心境をむき出しにしたような表情で、日番谷が雛森を見やる。

「落ち着いてね。日番谷くん」
「俺は落ち着いてる！」
どうどう、と雛森は日番谷の前に手のひらを翳した。
そして、おもむろに言った。
「袋とじ、よ」
「は？」
さすがに思いの他の発言だったのか、日番谷がぽかんとした。
「ホラ、精霊廷通信で、袋とじってたまにやるでしょ。
乱菊さんが濡れ猫なんとかってやってたり」
「・・・あぁ」
乱菊はノリノリだったのだが、あまりの弾けっぷりに、鼻血を吹いた隊士は数知れず・・・という。日番谷は開きもしていない。

「・・・で。それが、この話とどう繋がるんだ？」
イヤな予感が背中を駆け上がるのを感じながら、日番谷は聞いた。
判決を言い渡される者の気分だ。
「だから。だからね」
雛森は続けた。
「発売されるの。袋とじ入りの精霊廷通信が」
「袋とじって、誰の」
「・・・日番谷くんの」
「・・・は」
日番谷の顔から、魂が抜け出したかのように、全ての表情が滑り落ちた。
そしてそれが、雛森が失踪前の日番谷を見た最後になった。

4.　証言其の三　　S・Hの場合

「という訳で、貴方のところにやってきたんです。檜佐木副隊長」
尊は、九番隊舎の執務室から、ちょうど出てくるところだった檜佐木を捕まえて、事情を説明したところだった。
「次は精霊廷通信の編集員の、檜佐木副隊長のところに、日番谷隊長が来られたのではないかと」

「オイ！これ運んでおいてくれ」
檜佐木は、通りすがりの隊士に、手に持っていた書類の束を手渡すと、尊を見下ろして、ため息をついた。
「あぁ。確かに日番谷隊長は昨日の夜、自室にいた俺のところに来たよ」
「そ！それで？袋とじは・・・」
「あれは、恐ろしい夜だった・・・」
詰め寄る尊を他所に、檜佐木は遠い目を窓の外に向けた。
「そう。それはまるで、俺の大切なものが否定されたような・・・」

「あ！ちょっと待って」
尊は、檜佐木の顔の前に手のひらを翳し、すかさずけん制した。
「自分の話はいいですから。ウチの日番谷隊長の話をしてください」
この檜佐木、後輩の面倒見のいい兄ちゃんなのはいいのだが、山本総隊長に勝るに劣らないほど、話が長い。
しかも、自分の話が。
顔はいいのにモテないのは、俺話が多すぎるからではないかとの噂もあるくらいだ。
「あー・・そうか？」
檜佐木は一瞬寂しそうな顔をしたが、ガリガリと頭をかくと、昨夜のことを話しだした。

その夜、檜佐木は、自室にこもり、ギターを爪弾いていた。
「き～みを、あ～いしてる～俺。Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ～」
作詞・作曲、檜佐木修平。お世辞にも、うまいとは言えない。
うるさい、という評判をいただくくらいだ。
しかし、その時檜佐木は、ノリに乗っていた。自分の世界に入り込んでいた。
「ｙｏｕ～～。Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！」
決まった・・・ジャーン、と最後にギターを鳴らし、目を開けたときだった。

「ふっ！」
いつの間にそこにいたのか。
自室の襖を開けてそこに佇んでいたのは、十番隊隊長・日番谷冬獅郎だった。
その表情は、まったくの無表情である。冷や汗が、つーっと檜佐木の背中を流れた。
ど、どうする？どうする俺？
1．「何の御用ですか？」何事もなかったかのように振舞う
2．「いいでしょう、この曲？」敢えて地雷を踏んでみる
3．逃げる

「待て。檜佐木」
日番谷は、窓から脱出しようとした檜佐木を止めた。
「は？イヤ。曲は・・・」
「あさって発売の、精霊廷通信のことで、聞きたいことがあって来た」
げ。

尚悪い。
顔を引きつらせた檜佐木を正面から見ながら、日番谷はズイと部屋に踏み込んできた。
「何が載ってるか見せろ」

「イ！イヤ！
楽しみにして頂いてるとこ申し訳ないんですが、いくら隊長でも、発売前の精霊廷通信を見ることは・・・」
「俺が無断で掲載されてる可能性があってもか??」
違う。今日の日番谷は、いつもと違う。
声に、激しくドスがきいている。

「えっ、いやそれは」
「ここにあるんだろ?」
「い！いいえ！ありません！！」
「さっき、すぐそこの廊下で出会った九番隊の隊士に聞いたら、『自室で最終チェック中だ』と言ってたんだが！?」
日番谷の声に、はっきりと分かるほどの怒りが篭っている。
まずい。これは本格的にまずい。
タイミング悪く、隣の部屋から、隊士の声が聞こえた。
「日番谷隊長。本はありましたか?」
「ああ。今見せてもらうところだ」
そういいながら、日番谷が檜佐木を真っ向から睨み付けた。
はっきり言って、非常に怖い。

あ・・・後で覚えてろっ・・・！
声だけでは誰とも分からない、某隊士に檜佐木は悪態をついた。
檜佐木は、こっそりと、それとは分からないほどかすかに、後ろに視線をずらせる。
確かに、さっきまで精霊廷通信の最終チェックをしていたのは事実

だ。
しかし・・・読み終わった後、机の中に仕舞ったはず。
「そっちか？」
しかし、そのわずかな瞳の動きを、日番谷は見逃さない。
檜佐木を押しのけて、机のほうに歩み寄ろうとした。
――　万事休す！

「ギ！ギターとか興味ないっスか、日番谷隊長！！」
とっさに檜佐木は、手にしていたギターを、日番谷の前に突きつけた。
「あーん？」
育ちの悪さを前面に出して、日番谷が胡散臭そうな目をギターと檜佐木に向けた。
しかし、檜佐木は乱菊から聞いて知っている。
日番谷は何事にも淡白に見せて、新しいものには目が無いのだ。
狙い通り。日番谷は、怪訝そうな顔のまま、指先でギターの弦を弾いた。
ピーン、と高い音が鳴り、日番谷の視線は弦に注がれる。
「こうやって弾くのか？」
ためしに手渡してみると、あっさりと受け取った。

ちゃぶ台に腰を下ろすと、見よう見まねでギターを持ち、ぎこちない手つきで、もう一度弦を弾いた。
視線は、完全にギターに落とされている。
――　一丁上がり！
隊長といえども、所詮は子供。
ひとつのものに集中している時に、別の玩具を与えられれば、そっちのほうに目が向く。

チラリ、と檜佐木は、次号の精霊廷通信を仕舞った机の引き出しを見やる。
ちょっとだけ引き出しが空いているが、大丈夫、これなら日番谷の位置から見えることはない。
ほっ、と檜佐木は胸をなでおろす。
そう。あの特別付録だけは、絶対に載せなければいけない。約束、したのだから。
後は、日番谷にもう少しギターを弾いてもらって・・・適当なところで帰ってもらえばいい。
それにしても、完璧な曲だ。そう、俺の作曲センスを見事に・・・
「ん？」
そこまで考えた檜佐木は、日番谷を見やった。

ためらいの無い指が、ギターの弦の上を踊る。
爪弾くのは、間違いも無い、さきほど檜佐木が弾いていた曲に他ならなかった。
ただ、檜佐木と比べれば、段違いに腕がいい。
弾き始めは、いかにも初心者、という手探りな音だったはずだ。
しかし、一曲弾き終える間に、タップリ情感まで込めるまでに上達するとは。

「なんで・・・一曲全部知ってるんスか！」
檜佐木の悲鳴のような声に、弾き終わった日番谷は、こともなげに言った。
「なんでってお前、毎晩みてーに部屋で弾いてるだろうが。隣の隊舎だ、嫌でも聞こえる」
「なんで弾けるんスか！」
「どの弦がどの音を出すか分かれば、簡単だろ」
簡単だろ・・・簡単だろ・・・簡単だろ・・・
日番谷の最後の言葉が、エコーのように檜佐木の中で響き渡る。

そう。
日番谷冬獅郎は、ただの子供ではない。死神史上最年少で隊長格まで上り詰めた、神童なのだ。
それを失念していた。
「まぁ、こんなしょうもない曲なんて、どうだっていい」
「ど・・・」
しょうもない曲？どうだっていい？
檜佐木が凍り付いている間に、日番谷はギターをちゃぶ台に立てかけ、立ち上がった。
「じゃあ俺は、用事を済ませるとするか」
そう言った途端、ふっ・・・と日番谷の姿が、その場から掻き消えた。

「あっ！」
檜佐木が声を上げたときには、その姿は、精霊廷通信を仕舞った机の前に現れていた。
「ちょっと待・・・」
手を伸ばしたが、間に合うわけが無い。
日番谷はさらりと机を開け、中の精霊廷通信を取り出した。
「ちょっと！瞬歩をこんなことに使っていいんスか！」
「やっぱりあった、袋とじ！」
檜佐木の言葉など全く聞いていない。
日番谷は、乱暴に頁をめくった、が・・・

「オイ。それはどこにあるんだ？」
「え？いやだから」
「吐け！」
まるで、取調室の警察官のような言葉を吐いて、日番谷は檜佐木に詰め寄った。

「ちょ！ちょっと！寒いっス！俺凍ってるっス！」
日番谷に襟首をつかまれたところから、パキパキと着物が氷に覆われていく。
「今日中に写真届けるって、乱菊さんが昼間・・・！」
ぴたり、と日番谷の手が止まった。
そのまま、檜佐木の襟首を離す。

――　しまった・・・
檜佐木は自分の口を呪ったが、今更手遅れだった。
チラリ、と目の前に立つ日番谷を見上げる。そして、
「ひぃ・・・」
思わず、悲鳴を上げていた。

「まー・つー・もー・とー・・・！」
ビキッ、と日番谷のこめかみに浮かんだ血管を見た、と思った途端、
日番谷の姿は、その場から消えていた。
・・・それが、檜佐木が失踪前の日番谷を見た、最期だった。

5.　証言其の四　R・Mの場合_決闘編

「どういうことですか副隊長。あたし戻ってきたじゃないですか」
「・・・」
乱菊は、パリ、とせんべいを齧りながら、無言で尊を見返した。
長い足を長椅子に投げ出した、尊が見慣れた姿である。
「原因、分かったの？」
「分かったの？じゃないですよ。
マジギレした日番谷隊長が、昨日副隊長のところに来たんじゃないんですか？」

足取りをたどって来い、と指示したのは乱菊だ。
それなのに辿った最後が乱菊本人では、不機嫌にもなるというものだ。
乱菊は、しばらくの間、遠くに目をやって考えていたが、不意に言った。
「あー。ひょっとして、袋とじ？」
「そう！それです！！」
「でもねえ、あんなの、失踪するほど大したことないわよ？」
大したことあるか、ないか。それは乱菊じゃなくて日番谷が決めることじゃないのか。
尊はぐっと拳を握り締める。
「袋とじって、何なんです！やっぱり日番谷隊長の写真ですか？」
怒った口調のまま、長椅子の前のテーブルに置かれたせんべいをバリバリつまみながら、尊が乱菊を見返した。

「ええ。写真よ」
こともなげに、乱菊は返した。
「その名も『キスの一秒前』」

「ぶはっ！！」
尊が、口に入れたせんべいを、盛大に噴き出した。

昨夜、夜１０時ごろ。場所は、屋内にある十番隊修練場である。
「詰めが甘いっ！」
乱菊が振り下ろした木刀が、向かい合った隊士の肩口に決まった。
バシーン、と小気味よい音が響き、乱菊より一回りは大きいその体が、後ろに吹っ飛ばされた。
「次っ！！」
男らしくも、木刀を片手で肩に担ぐと、壁沿いに一列に並んだ隊士たちを、ぐるりとにらみつけた。

「一体どうしたんスか、副隊長・・・いっつもは修練場なんて来ないのに」
乱菊の視線を避け、隊士たちはぼそぼそと言葉を交し合った。
談話室で、就寝前の雑談を楽しんでいたところ、いきなり呼び出されたのだ。
士気があがらないのも、当然というものだろう。
「どうやら、さっき風呂場で、体重計に乗ったら、体重増えてたみたいですよ」
「まじか？」
「でも、無理も無いような・・・」

隊士たちの記憶にある乱菊は、いつも何かを食っている。
昼には饅頭、団子、せんべい、そして日番谷の祖母の差し入れの甘納豆。
更に夜な夜なの深酒。彼女の酒に付き合い、酔いつぶされた隊士は数知れず。

この夢のようなスタイルを保ち続けていることのほうが、不思議なくらいだ。

「そこ、うるさい！」

会話を聞いたのか聞いていないのか、乱菊がビシ！と木刀の先を突きつけた。

「あたしのダイエット、付き合ってもらうからね！」

ワケの分からない乱菊の気迫に押され、隊士たちが言葉に詰まる。

隊士のほとんどは男だから、妙齢の美女と戦えて、心が弾まないわけではない。

だが、その興奮をはるかに上回るほど・・・松本乱菊は、強いのだ。

相手は、副隊長。逆立ちしたって、勝てる相手ではない。

「いいから次！誰でもいいから出てきなさいよ！」

「じゃあ、俺が相手してもらおうか」

突然、その場に聞こえてきた声に、その場の空気がピシリと固まった。

「へ？」

乱菊が、木刀を担いだまま、廊下のほうを見やる。

引き戸をスラリと開けて現れたのは・・・彼らが隊長、日番谷冬獅郎だった。

「た、たたたた隊長？」

「木刀！」

動揺しまくる乱菊にかまわず、日番谷は手を差し出して怒鳴る。

「はい、こちらに！」

その手に、駆け寄ってきた隊士が、木刀を渡した。

「オッ、隊長と副隊長の一戦だ！！」

「他のヤツも呼んで来い！！」

日番谷が修練場にやってくるのは、それほど珍しいことではない。
失踪した隊長の作業も引き受け、残務処理も手がける日番谷が、一体どうやってそのような時間を捻出するのかは謎だ。
しかし、特に藍染反乱後、部下に力をつけてやりたいという思いからか、日番谷が直稽古をつける回数は、かなり増えた。

隊長にアピールするチャンス、とばかりに本気でかかってゆく隊士は数多い。
しかし日番谷に霊圧を開放させるどころか、撫でるような力しか出させていないのは事実。
だが・・・さすがの日番谷も、副隊長の乱菊が相手となると、軽く受け流すことはできまい。
本気の隊長が見られる・・・！隊士たちが興奮するのも、無理なことではなかった。

「やや止めましょうよ、子供はもう寝る時間ですよ？」
乱菊は木刀を持ったまま、素早く後ろに下がった。
隊長と一騎打ちなんて、冗談じゃない。
この乙女の柔肌に、傷なんてつこうものなら・・・
それに、今夜の日番谷の表情は、何かしらヤバイ。目が爛々と輝いている。

ダン、と日番谷が一歩踏み出した。
「成敗！」
成敗ってナンデスカ？
乱菊が聞くよりも前に、日番谷の体が、ふっとその場から掻き消えた。
「くっ！」
ほとんど山勘で、乱菊が振りかざした木刀と、瞬歩でその場に現れた日番谷の木刀が交錯する。

「ほぉ。受け止めるのか」
「受け止められる・・・ワケありません！！」
ヤバイ。刀を合わせた瞬間、直感的に乱菊は察した。
刀身を斜めにずらせ、日番谷の一撃を受け流した。
ドン！
途端に、強い衝撃が修練場の床に響き、乱菊は跳び下がった。

――　なに・・・
床が、まるで重たい何かが落ちてきたかのように弾け、裂け目から床下がのぞいた。
同時に、床下から冷たい空気が流れてきたが、この寒気は絶対、それだけが原因じゃない。
日番谷の木刀は、床には触れていなかったはず。なのに、どうして床が割れるのか。
「と、いうことは」
ピシッ・・・と乱菊の木刀にひびが入り、切っ先が床に落ちた。
「そうよね、そりゃそうなるわよね。直接触れたんだもの・・・」
エへへ、と乱菊は頭をかいて・・・ささっ、と後ろに下がった。

「オイ、もうこれで終わりとか言わないよな？」
「た、隊長がSだなんて知りませんでした！」
「だまれ。次の木刀取れ」
そこに横たわるのは沈黙と、圧倒的な力の差。
見守る隊士たちも静まり返り、固唾を飲んで見守っている。

お・・・おかしい。
乱菊は焦りながらも、考えていた。
いつもの日番谷なら、
「いやーん、もう止めてくださいよー。参りました！」
の一言でも言えば、

「しょうがねえな」
の一言と、ため息で流してくれそうなものなのに。
今日の日番谷は、そんな軽口を叩ける雰囲気ではない。
――　わー、歩いてきた！こっち歩いてきた！！
日番谷のこめかみに浮かんだ青筋を、その時はっきりと乱菊は見た。

――　まさか、アレが・・・
アレ。それは、乱菊が最近手に入れた、「秘密兵器」である。
予算を削られた女性死神協会の、起死回生の一手。
同じく精霊廷通信の予算削減に苦しむ、檜佐木と手を組んで、前評判を女性死神に回しまでしたのに。
――　アレが、隊長の耳に入ったの？
だとしたら、お怒りでもおかしくはない。
そっ、と懐に手をやる。何とかして、これを檜佐木のもとに届けなくては。

「こんなん当たったら、あたし怪我しちゃいますよ。仕事できなくなっちゃいますよ？」
「しごと・・・」
日番谷が、小首を傾げた。
「お前、前に仕事したのいつだ？」
酷い。でも、はっきり思い出せないのは事実だ。
「くだらねえ写真撮ってるから、腕が鈍るんだよ」
きたーーー！
乱菊はゴクリとツバを飲む。
そうか。知ってるなら、こっちにも考えがある。

「言っときますけど。例の写真を撮ったのは、あたしじゃないですよ」
「あ？」

これは意外だったのか、日番谷は乱菊を見つめたまま、足を止めた。
かかった。
スゥ、と息を吸い込んで、乱菊は大声で言い放った。
「どこぞでキスなんかしてる隊長より、マシです！！」
「・・・は」
乱菊は、日番谷がこれほどに、間の抜けた顔をするのを初めて見た。

「ほら、ほら！沈黙した！否定しないじゃないですか！！」
一瞬の間をおいて、どよめく十番隊修練場。
百人以上集まった隊士の目が、日番谷ひとりに集中した。

6．　証言其の四　R・Mの場合_脱走編

「な・・・にを、くだらねーこと言ってんだ！ンなことしてねー！証拠がどこにあンだ！」
言葉を忘れたかのように呆けていた日番谷が、急に復活した。
「あたし見ましたよ！頬をぽっと赤らめて、目も潤んじゃってる隊長の写真！
これがキス1秒前じゃなくて、何だっていう――」
バキッ、と。日番谷の手が、木刀の柄を握りつぶした。

「最早言葉は無用だ」
舌戦じゃ勝てないと分かっただけだろうに・・・
でも、動揺してる。
今の隊長なら、何とか逃げ切れるかもしれない。

乱菊はトドメを差してみる。
「どちらかって言うと、キスする側というより、される側の顔でしたね」
「死ね」
木刀の刀身を握り、日番谷が物騒な言葉を漏らした。

乱菊は、帯の後ろに差した「灰猫」を引き抜いた。
木刀相手に真剣はありえないが、この実力差だ、こうでもしないと勝ち目は無い。
ダン！と2組の足が、床を蹴る。
次の瞬間、2人の体が、目にも止まらぬ速さで交錯した。

「お！」
「見ろ！」

リアクションに困っていた隊士たちが、一様にどよめき、着地して動きを止めた2人を見やった。
カシン・・・
音を立て、日番谷の握っていた木刀の刀身に線が入り、切っ先が床に落ちた。

「ふっ・・・あたしの一本ですね！さっ、ここで切り上げて・・・」
「そーだな」
そして、背を向けていた日番谷が振り返った瞬間・・・
「！」
乱菊は、この戦いが始まって一番、ショックを受けた。
「そ、そのカメラ・・・」
日番谷は、どこから手にしたのか、小さなデジタルカメラを手に持っていた。

まさか！
乱菊は、自分の懐に手をやって・・・思わず、悲鳴を上げた。
「きゃー！いつの間に！セクハラです隊長！」
「セクハラはそっちだろーが！こんな写真・・・！」
「ムダですよーだ！」
乱菊はとっさに言い放った。
最早、子供の口ゲンカと化しているが、体裁には構ってられない。

「もう、データはとっくに、印刷班のところに回ってますから！
もうあの写真は、百枚も、千枚も印刷済です！」
なーんて、ね。
乱菊は心の中で付け加えた。
もしそうなら、盗られた直後、あれほど動揺はしない。
日番谷が、こんな嘘に気づかないわけは無い、といいながら気づいていた。

ところが。

「お？」

乱菊は日番谷を見つめる。

視線の先で、よろり、と日番谷がふらついた。

「マジかよ・・・」

カターン、と、デジタルカメラが床に落ちる。

ふらついた日番谷の体が、ふっ・・・と、その場から立ち消えた。

「・・・ていうことが、昨晩あったわね。そういえば」

「それじゃないですか！ていうか、１００％それじゃないですか！！」

向かい合った尊の剣幕に、乱菊は怪訝そうに顔をしかめた。

「でもねー、写真が精霊廷通信に載るだけよ？何がそんなに問題なのよ？」

それは、濡れ猫変化なんて、発禁すれすれのきわどい写真を進んで載せたがる、乱菊には理解できないかもしれないが。

もしもあたしが、「キスの一秒前」なんて写真を載せられたら・・・

「おヨメにいけない♪」

「なにがよ」

「いえ。とにかく、本当はどうなってんですか？その写真」

「あたしが、そんな手際よく、写真を印刷しまくってる訳ないじゃない。ここよ、ここ」

乱菊は、その豊満すぎる懐から、デジタルカメラを取り出した。

「これって・・・昨日、隊長が一旦乱菊さんから奪ったやつですか？」

「そうそう。あたしの言葉を信じて、これを置いていなくなったの

が運のつき・・・」
大体、隊長らしくないのよねー、と鼻歌交じりに、カメラの電源を入れた乱菊を、尊は言葉を失って見下ろしていた。

――　ひ・・・ひどすぎる。
自らの隊長を何だと思ってるのか。
しかし・・・尊はチラリと思う。
恥ずかしい写真をバラ撒かれるといっても、いきなり失踪するような行動は、日番谷らしくない。
乱菊の話だけじゃなく、これまで聞いた京楽、雛森、檜佐木、誰の話をとっても、どこか、「らしくない」ところがあったような気がする。
ただそれが何なのか思い出せるほど、尊の頭は立派ではない。

「それに・・・その写真、誰が撮ったんです？やっぱり副隊長なんでしょ？」
「いや、それは違うわよ」
ニヤリ、と笑って乱菊は言った。
「あたしじゃ、隊長警戒しちゃってダメだもの。
絶っ対、あの子からは隊長『逃げられない』から」
「えー、そのうらやましい人、誰なんですか！」
もしかしたら、キスシーンもその子との？
そう言い募ろうとした時だった。

「ぎゃ――――！！！」
何の前触れもなく、唐突に乱菊が絶叫した。
「ぎゃー！！！何ですか急に！！！」
「ない」
「へっ？」
尊は、乱菊の後ろから、デジタルカメラのモニターを覗き込んだ。

確かに、画面には何の画像も映っていない。

「ま！まさか！」
乱菊の焦る指が、ｍｉｃｒｏ　ＳＤカードの挿入口を開ける。
「信じられない・・・あの一瞬で、カードだけ抜いて行ったわけ？」
あのガキ、と舌打ちしたのは、聴かなかったことにする。
きっと日番谷も、あのババア、とどこかで舌打ちくらいしてそうだ。

「ふふふ」
突然笑い出した乱菊を、気が狂ったのかとおびえながら、尊は見下ろした。
「甘いわ・・・女性死神協会から、逃げ切ろうなんて」
「いー？まだやるんですか？副隊長」
「いい尊？隊長の恥ずかしい写真なのよ？想像してみなさいよ」
ぐいん、と乱菊は、自分の顔を尊に近づけた。

「ぽっと赤らめた頬、期待にうるんだ切ない瞳・・・
そんな『日番谷冬獅郎』をあんた、見たくないの」
「っぶはっ！！」
尊は、こみ上げそうになった鼻血を懸命に抑えた。
「見たい・・・です」
「でしょー」
乱菊の瞳が、キラーンと輝いた。
「天廷空羅よ、尊！精霊廷中の女性死神に、伝えなさい！」

そして、その一分後。尊の声で、女性だけに声が届いた。
「明日発売の『精霊廷通信』に掲載されるはずだった、『日番谷隊長の袋とじ』の写真が、日番谷隊長本人によって強奪。
隊長は現在写真のデータを持ったまま逃走中です！」
「ええっ？？」

「なんですって？楽しみにしてたのに！！」
男性死神の怪訝な視線を気にもせず、女性死神たちは悲鳴を上げた。
重々しい声で、脳内放送は続いた。
「女性死神に告ぐ！『日番谷冬獅郎を・・・拘束せよ』！！」

7．　朽木邸の望まぬ喧騒―前編

あれは、いつのことだったか。
おそらく、ちょうど一週間前の土曜。時間は早朝で間違いない。
目を閉じていても、外が明るくなってきたことは分かる。
その場を流れる空気は、春とは信じられないほど寒々しく、頬を横切る風は、切るように冷たい。

――　もう日の出か・・・
だとすると、もう戻らなければ。
日番谷は、スッと目を開けた。

とたんに、目の前に延々と蒼く広がる、氷原が目に入った。
手にした刀「氷輪丸」をぐっと握りしめる。
「卍解・・・！」
口にすると同時に、体の周囲を、冷気が覆う。
否。
自分自身が、冷気の中心だ。

ほとばしり出る霊圧が、体を氷で覆い、周囲の空気を制圧してゆく。
暁色に染まろうとしていた空に、早送りのような速度で暗雲が立ち込めてゆく。
パリッ、と雲間に稲妻が走るのが見えた時には、あたりは再び夜の闇に覆われていた。
「『大紅蓮氷輪丸』！」
自分の声に、もうひとつの声が重なる。

声というよりも、地鳴りにも似たその響きは、彼の心に棲む龍、「氷輪丸」のものだ。

誰よりも身近に、誰よりも冷たく、誰よりも日番谷を包み込んできた、彼の分身。
心までが、氷のように冴え、澄み渡ってゆく。
一瞬の内に氷の中から、圧倒的な質量の龍がその姿を現す。
何十メートルもあるその龍は、辺りの空気をビリビリと震わせ、咆哮した。

龍の紅い瞳と、日番谷の蒼い瞳が一瞬交錯する。
――　行け。
日番谷の心の声のままに、龍は飛翔した。
そして、日番谷の前方１００メートルくらいの位置にあった岩壁に突進する。
龍と岩壁が接触した、と思った次の瞬間、岩壁は、玩具のように粉々に砕け散った。
雷が落ちたような轟音が響き、地面がぐらぐらと揺れる。

「・・・まだだ・・・」
そう呟いた時、体がふらり、とよろめいた。
――　さすがに、もう限界か・・・
氷に覆われた地面に、倒れるように仰向けになる。
背中の冷たさを心地よく感じるほど、体が火照っていた。

荒く息をついた時、ふわり、と自分を覆ったぬくもりに気づく。
顔をあげると、雲間から朝日が差し込み、自分の周りだけスポットライトのように照らし出していた。
氷に閉ざされた世界の中でも、それは確かに、温かかった。
自然の力の前には、かなわない。
日番谷は、無意識のうちに、微笑んでいた。
諦めか、悔しさか、それとも単純な笑みか。すべてが混ざったような気分だった。

対戦した破面から、「卍解が不完全だ」と指摘されて、2ヶ月が経った。
何が足りないと言うのか、修行をいくら重ねても、糸口さえも見えないのだ。
ただ、卍解に達するまでの道のりは、誰の協力も得られないのは、分かっていた。
それはただ、自分と氷輪丸の間の問題でしかない。

――　帰るか。
どれくらい寝転んでいただろう。日番谷は荒い息を整えると、目を開けた。
早くしないと、十番隊舎で乱菊が起きだしてくる。
長い間一緒にいたせいなのか、乱菊は日番谷の霊圧については、殊の外敏感なのだ。
穿界門を使うほど遠い流魂街の外れに移動し、誰も気づかないほどの強力な結界を張っていたとしても、気づくかもしれないほどに。

隊長とは、いついかなる時でも、部下の前では超然としていなければならない。
そうでなければ、部下は不安になるからだ。
不安は、敗北に・・・更に言えば死につながる。
特に、藍染がいつ攻めてくるとも分からない、今この時には。
だから、自分が不完全な卍解の修行をしていることは、誰にも気づかれてはならなかった。

「！」
その時、日番谷はあわてて上半身を起こした。
「誰だ？」
思わず、口に出す。

自分の結界の中に、入り込んできた気配が、ひとつ。
――　バカな・・・
疲れ果てていようが隊長の張る結界だ。
たとえ乱菊だろうと、この中に入ってくることはかなわないはずだ。

穿界門が、開いている。
だとすると、やってきたのは死神か。
こちらが驚いたのが滑稽になるほど、その人物は気配を隠してはいない。
パリ・・・と、足音が聞こえた。
やがて、その人物が姿を現した時、日番谷は肩の力を抜いた。

「なんだ、お前か・・・」
頷いて近寄ってきた、その肩にかけられていたものに、日番谷の視線は吸い寄せられた。
それは、こんな場面にはおよそ不釣合いな・・・小さなカメラだった。

「！」
日番谷は、そこまで考えてハッと我に返った。
顔を上げた瞬間、カポーン、と竹が岩を打つ音が聞こえた。
さわさわと、流れる水の音が聞こえてくるほど、周囲は静寂に包まれていた。
目に映ったのは、目の前に差し出された、手で抱えて持つくらいの大きさの、茶碗。
その茶碗には、この屋敷の主によって泡立てられた抹茶が、並々と

注がれている。
無言の瞳に促され、日番谷はその茶器を両手で受け取った。
そのまま口へ運ぶと、口の中に、なんともいえない苦味のある味が広がった。
――　まず・・・
しかしそれを言うと、子供だと思われそうだから、口には出さない。

「結構なお手前で」
こういう時はこう返す、くらいの作法は心得ている。
軽く頷いた、主の口元は、あるかなしかの微笑みに縁取られていた。

8．　朽木邸の望まぬ喧騒―後編

カポーン。
竹が鳴る音が、静寂を切り取るように響く。
百畳はあるかと思われる、清廉な和室を、春のさわやかな風が吹き抜けていった。

「それで・・・」
日番谷の向かいに座した男が、日番谷を見た。
男の名前は、朽木白哉。
由緒ただしき、死神四大貴族のひとつ「朽木家」の跡取りである。
いつも超然としているその表情は、何を考えているか一切分からない。

漆黒に閉ざされた切れ長の瞳と、澄んだ蒼緑の瞳が、静謐な空気の中でぴったりと合った。
「兄（けい）は一体、ここで何をしているのだ」
昨夜、夜も更けた頃になって、突然「何も言わずに匿ってくれ」とやってきたのだ。
特に断るだけの理由は無い。
それだけの理由で、何も聞かずに泊めたまではよかったが・・・

――　そういう、ことか。
六番隊舎からの帰り道、血眼になって日番谷を探す女性死神たちに、腐るほど出会って白哉は納得した。
「袋とじ」とか、「あの写真」とか、言葉の端々をつなぎ合わせてみれば、大体の状況は読める。
そして女性死神たちの視線は、基本精霊廷の外に向いていた。
まぁ確かに、「探さないでください」と言って出て行った以上、こ

んなお膝元にいるなんて、あまり予想しないだろう。

「聞きたいスか」

そう言って白哉を見返す日番谷の顔には、「聞いてくれるな」と書いてある。

「いや。これからどうするのかだけ聞ければいい」

経緯を聞かされても、どうしてやれる訳でもない。

というより、積極的に関わるのは御免蒙りたい。

「とりあえず、明日の発売日まで匿ってくれ」

日番谷はため息混じりにそう返すと、懐から、小さなＳＤカードを取り出した。

「一応抜いてきて助かった。

このデータをそこまで探してるってことは、バックアップは無いってことだろうしな。あのババア・・・」

日番谷が漏らした最後の部分は、聴かなかったことにした。

「捨ててしまえばよいではないか」

「それは、できればしたくない」

日番谷は即座にそういうと、立ち上がり縁側に向かった。

「なぜだ？」

「このカードに収まってる写真を撮ったのは、松本じゃない。

思い出したんだ。あのカメラを持ってたのが誰か」

「・・・そうか」

日番谷が、かすかに微笑んでいるのを、白哉は意外な思いで見守った。

同じ隊長同士、付き合いはそれなりに長いが、日番谷は少しでも微笑むところを見るのは、初めてだったからだ。

だからこそ、それが誰なのか突っ込んで聞く気は白哉にはない。

並んで縁側に立ち、春の庭を眺めたとき・・・
不意に柔らかい風が吹きぬけ、白哉が肩にゆるりと巻いた襟巻きがスルリと肩を離れた。
それは風にあおられ、近くの池の上に、舞い落ちてゆく。
タン、と、白哉の傍らで、軽い足が縁側を蹴った。
「日番谷・・・」
白哉が呼びかけた時には、日番谷はその重さが無いかのような小柄な体を、中空に躍らせていた。

パシ、とその手が襟巻きを掴む。
池の上に落ちるかと思われたが、その体は、まるで土の上に降りるかのように、池の上で止まった。
裸足のつま先だけが少しだけ水につかり、水面に美しい紋様が広がった。
白哉からは、まるでその体が浮かんでいるように見えた。

日番谷は無言で白哉を見返すと、襟巻きを掴んだ手を、白哉のほうに向ける。
再び風にあおられた襟巻きが日番谷を離れ、ゆらりと中空を漂った。
「すまぬな」
白哉は軽く目を閉じ、襟巻きを受け取る。

さえずる鳥の音に目を開けると、水上に留まる日番谷の肩に、数羽の小さな鳥が、舞い降りていた。
伸ばした指の上にも鳥が留まり、その鳥を見つめる日番谷の顔は、年相応にあどけなく見えた。

――　不思議な者だ。
あまり他人に関心を持たない白哉だが、日番谷のことは不思議な少

年だと思う。
冷静と情熱。
品性と野卑。
幼さと老獪さ。
相反する要素がきわどく同居し、日番谷という人間を形作っているように見える。

「騒ぎが収まるまで、いればよい」
場の空気が乱れない程度の、静かな声で白哉は呼びかけると、日番谷の返事を待たず背を向けた。
その背中を、日番谷は意外な思いで見送る。
触れることは出来るが、つかむことは出来ない。
凍らせはしないが、暖かく身を包むことも無い。
そんな、水のような男だと思っていたから。

「悪いな」
日番谷は鳥を空に見送ると、タン、と水面を蹴って縁側に戻った。
「万が一ここがかぎつけられたら、迷惑がかかる前に出て行く」
「気遣いは無用だ」
白哉は、部屋の奥へと向かいながら、こともなげに言った。
「ここは既に、女性死神の巣窟だからな」
「は？」
日番谷が聞き返すと、ほぼ同時だった。

ガシャコン、と何の変哲も無い部屋の壁の一部が、自動扉のように上へと開いた。
そこから、機械のように無表情な涅ネムが一歩歩み出ると、絶句する日番谷を無言で見やった。
「日番谷隊長、発見しました」
「わー！！」

身を翻した時には、既に遅し。

一体どこから沸いて出たのか、見慣れた女性死神協会の面子が、日番谷に向かって突進してきていた。
ざっと見ただけでも、ネム、砂蜂、虎徹の姉妹と常連が揃い踏んでいる。
「隊長！見つけたっ！！」
「てめェ松本！！」
聞きなれた声に、日番谷は振り返る。
「いい加減、観念してくださいっ！」
「するかっ！」
静まり返っていたはずの朽木邸は、あっという間に喧騒に飲み込まれた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

朽木邸が女性死神のアジト化してるのは、『カラブリ＋』設定です。
こんな豪邸嫌だ・・・

9．　女性死神協会の迷惑な戦い

「もらったぁっ！」
上司にかけるとは、およそ思えない言葉を吐き、乱菊が日番谷に手を伸ばした。
「甘ぇっ！」
これまた部下にかけるとは思えない言葉を放ち、日番谷が乱菊に手を伸ばす。
「きゃっ！」
飛び下がったのは、乱菊。日番谷の着物の裾を掴みかけた手が、一瞬で氷に覆われた。
「お湯！お湯！」
慌てて朽木邸の台所に走っていく背中を見て、
「まず1人・・・」
日番谷は心中でカウントした。

身軽な動きで庭に出ると、黒光りする瓦屋根の上にひょい、と飛び降りた。
そこには、すでに先客がいた。
金色の鯱の上に立った、十二番隊副隊長・涅ネムである。
――　似合わねえ。
燦然（さんぜん）と輝く鯱の上の死神は、安っぽい特撮ものに見えた。
上司・・・というか父親に似て悪趣味な奴だ、と日番谷は思う。

「ネムさん！加勢します！」
続いて屋根に飛び乗ってきたのは、四番隊副隊長・虎徹勇音だった。
――　副隊長が揃って、こんなトコで何やってんだか・・・
副隊長2人対隊長。
緊迫してもいい場面だろうが、状況が状況だけに、いまいち身が入

らない。

ネムは、無表情のまま、日番谷を見つめている。
日番谷とて、ネムが戦うところを、その目で見るのは初めてだった。
不意に、全く持って不意に。
ネムが、日番谷のほうに差し出した右手の手首を、折った。

ぼきっ。
その場に音が響き、
「痛っ！？」
虎徹勇音が顔を手で抑える。

ネムは、痛みなどカケラも感じていない表情で、折れた右手の切り口を、日番谷に向けた。
キュイーンキュイーン、と、人体から発しているとはとても思えない音が響いた。
「発射します」
「発射！？」
日番谷が聞き返した瞬間、ネムの手首から、恐ろしい勢いで砲弾が発射された。

「うぉ？」
日番谷は、とっさに氷輪丸を引き抜くと、刀の峰で砲弾を打ち返した。
カキーン！
小気味よい音とともに砲弾は吹っ飛び・・・虎徹の顎を直撃した。
――　やりすぎたか？
そう思った日番谷が見下ろすと、その砲弾から、シュー、となにやら煙が噴出した。
毒煙か？と思ったとき。

「停止・・・します」
煙を浴びた、ほかならぬネムが、屋根から転げ落ちてゆく。
――　えー？
あんまりな展開に言葉を失っていると、
「おい、涅！虎徹！」
屋根の下から、砂蜂の声が聞こえた。
とりあえず2人さらにクリアしたことに気づく。

――　無駄だ・・・
この戦いそのものが、無駄だ。
あの砂蜂が、さすがにここまで無意味な戦いには参戦しないだろう・・・か？
日番谷は、そこまで考えて自信をなくした。
最近ネコグッズばかり集めている砂蜂の心中など、日番谷には分からぬ。
とにかく、ここを離れないと。

朽木邸が女性死神協会の巣窟になっているとは知らなかったが（諦めきった白哉の表情が印象的だった）、
逆に言えば、女性死神の主力どころはここに集中していると言うことか。
氷輪丸を鞘に戻し、タン、と屋根を蹴ろうとした時。

「うっ！」
日番谷はうめくと同時に、身をのけぞらせた。
その首元を、苦無が一本、飛びぬけた。
「ちっ！」
舌打ちをすると、次々にキラリと輝きながら飛んでくる苦無をかわす。

カカカッ、と音を立てて、苦無が屋根に突き立った。

「お前、砂蜂・・・！」

やっぱり出てくるのか？

日番谷と屋根の上で対峙した砂蜂は、実に微妙な表情をしていた。

「勘違いするな！」

手にした苦無の切っ先を、日番谷に突きつけた。

「はぁ？」

勘違いするなも何も、開口一番がこれでは意味が分からない。

「言っておくが、貴様の写真など、私はこれっぽっちも興味は無い！これっぽっちもだ！」

「当たり前だ！！」

ていうか、そんなことを言うために、刃物を投げつけるな。

「全く、しょうもない写真を撮られおって！

せっ・・・ぷん写真など、は・・・は・・・破廉恥な！」

眉を吊り上げているが、ぽっ、と頬を赤らめているせいで、全然いつもの迫力が無い。

しかし。破廉恥。破廉恥か。

「お前の格好のほうが、よっぽど破廉恥だろうが！」

前から一度言ってやろうと思っていた。

隊首羽織を脱いだその着物は、あきらかに胸や腰のあたりの布地が足りない。

それを聞いた砂蜂は、自分のもっかの格好を見下ろし・・・カーッと見る間に赤くなった。

「やかましい、このマセガキが！」

動揺したせいか、口調までが若干変わっている。

「夜一様から引き継いだ衣装を侮辱するものは・・・斬る！」

キラーン、と砂蜂の指で、長い爪のような装飾物が光った。

飾りに見えるが、それは斬魂刀。同じ場所を2度斬られれば、命がないという。

「そんな理由で殺されてたまるか！」

「貴様が死んだら、例の写真を生前写真に使ってやるから心配するな」

嫌だ。

あの写真がある限り、死んでも死に切れないと日番谷ははっきりと思った。

「大体、なぜ私がこのような茶番に付き合わねばならぬ？全て貴様のせいだ！」

「そんなことは松本に言え！」

一番迷惑かけられてるのはこっちだ、と日番谷は声を大にする。

だが、見る限り砂蜂は、日番谷よりもよっぽど腹を立てているように見える。

「あ！日番谷隊長！！」

「きゃー、見つけたわ！」

恐れていた黄色い声に、日番谷はハッと顔を通りに向けた。

確かに屋根の上で立ち回りを演じたのはまずかった。

女性死神たちが、目を輝かせてこちらに集まりつつあるのが見えた。

――　まずい・・・

囲まれたら面倒・・・いや、むしろ恥ずかしい。

こんな場面を山本総隊長に見られたら、と想像するだけで耐えられない。

だが、このまま砂蜂と戦いにもつれこめば、隊長同士簡単にケリがつくはずが無い。

「分かった。砂蜂」

しばし考えた日番谷は、砂蜂の前に手のひらを突き出した。
「・・・何だ？」
「現世の浦原商店には知り合いがいる。
四楓院夜一の写真を貰ってやるから、ここは手を引け」
「馬鹿にするな！」
間髪いれず、砂蜂は拳をギリリと握り締めて、大声を出した。

「私がそのような交渉に屈・・・くっ・・・くっするなど・・・」
見る間に、苦しげに眉間に皺が寄る。その割りには頬が上気して嬉しそうでもある。
前の上司にあたる四楓院夜一を、いかに砂蜂が敬愛しているか、それは精霊廷でも今や知らぬものは無い。
若干・・・というよりも大分、敬愛のレベルを逸脱してしまってはいるが。
葛藤している砂蜂を尻目に、日番谷はさっさと身を翻した。

――　しょうがねえ。
それと同時に、懐からＳＤカードを取り出した。
乱菊のものなら一瞬で破壊するが、「あいつ」のものだと思うと、ためらわずにはいられなかった。
でも、無駄な戦いを止めるには、このカードは今壊すしかない。
――　許せ・・・
そう思った日番谷が、そのカードを握る手に力をこめたとき。

――　え？
急に、カードを握る自分の手が、ぶれたように見えた。
そう思ったとき。
「きゃはははは！！」
この場面では、決して聞きたくなかった笑い声が聞こえた。・・・
日番谷のすぐ耳元で。

１０．　日番谷隊長の悪夢

「な・・・」
「もーらいっ！！」
タン、と小さな足が、日番谷の手を軽く蹴った。
それと同時に空中に放り出されたカードをつかんだのは・・・

「草鹿！」
「これでこんぺいとう百袋ゲット！！」
満面の笑みで日番谷から飛び下がったやちるを、日番谷は唖然として眺めた。
高々こんぺいとう百袋で、自分の恥が売られてたまるか。

「返せ！」
日番谷がやちるを追おうとしたとき、やちるは思いもしない行動に出た。
「ひっつんの恥ずかしい写真、ほしい人ー！！」
あろうことか、やちるは精霊廷全体に響くような大声で、そう言い放ったのである。
「はーい！！！」
それに返したのは、ゾッとするような女死神の声、声、声。

――　悪夢だ・・・
日番谷は、朽木邸を取り囲んだ女性死神たちを見て、文字通りクラクラした。
「あげるっ！」
しゅん、とやちるが、カードをそばにいた娘に投げる。
それをキャッチした娘は、頬を上気させると同時に駆け出した。
「おい、待て！！」

日番谷が娘を追おうとした時だった。

「姉さんの仇っ！」

すかさず、日番谷の背中に取り付いた小柄な女は、虎徹勇音の妹、清音だった。

「砲弾ぶっつけたりして！姉さんの顎が割れちゃったらどうするんですか！」

「砲弾を放ってきた涅に言え、そんなこと！」

振り払ったのは、一瞬。

「おい！カード返せ！」

カードを取った娘のところに飛び降り、その肩をぐい、と揺さぶった。

「あぁ、日番谷隊長積極的♪」

「カードはど・こ・だ」

「渡しちゃいました」

「誰に！！」

「知らない人に」

振り返った日番谷は、自分を取り囲む女死神たちの群れに、絶句した。

木を隠すなら森へ。

そんな言葉をやちるが知っていたとは思えないが。

これじゃ、あんなカードの行方追える訳ない。

「日番谷隊長、サインください！」

「日番谷隊長、こっち向いて！」

日番谷隊長コールに囲まれ。日番谷は、がっくりと肩を落とした。

その頃。
精霊廷の西門で、児丹坊は精霊廷内を振り返っていた。
――　今日は、やたらとやかましいな。
バタバタと死神たちが走り回り、甲高い声があたりに木霊している。
一瞬、また旅禍でも入り込んだのか、と思ったが、事態は思ったより奇妙だった。

騒いでいるのが、女性の死神だけなのである。
男の死神は、怪訝そうな・・・もしくは、あまり関わりたくなさそうな顔をして、それを見守っている。

「なぁ。なにか起こったんだ？」
振り返った先にいた、薄い金色の髪の死神に、声をかけてみる。
「いや・・・」
三番隊副隊長、吉良イヅルは、なんとも当惑した顔で返した。
「いまいち、何が起こっているのか分からないんですよ。
まぁ、僕ら隊長格に招集がかかってない以上、それほど深刻な事態じゃないのは間違いないんですが・・・」
「・・・なんか、あっちに人が集まってるように見えるぞ？」

児丹坊は、身長が１０メートル以上という、異常な巨漢である。
精霊廷内を伸び上がって見渡すと、一番隊のほうを指差した。
「一番隊・・・それは気になりますね」
吉良は怪訝そうな顔をすると、
「ここを頼みます、児丹坊さん」
そういい残し、一番隊の方に駆け出した。

――　まぁ、あんまりたいした事態とは思えねえけどな・・・
児丹坊は心中付け足すと、一番隊の方を凝視した。
集まっているのは、どうやら女性死神達らしい。

狭い場所にひしめきあっている姿は、ワラワラとかワイワイとかいう擬似語が似合う。
つまり、それほど緊迫しているとは見えないということだ。
藍染の反乱以後、火が消えたように静まり返っていた精霊廷が、ここまで騒がしいのは久しぶりだった。

そう思ったとき・・・児丹坊は、小さな足音に振り返る。
「あれ？おめーは・・・」
「中にはいりたいの」
ひたむきな目が、児丹坊を見上げている。
「といってもなぁ。おめは死神じゃねえ。
中に入ろうとしようもんなら、上から門が降ってくるぞ？怪我じゃすまねえから、やめとけ」

「声が聞こえたの。さっき」
児丹坊の言葉を聴いていないように、その桃色の唇が言葉をつむいだ。
「日番谷隊長を拘束せよって」
「はぁ？？？冬獅郎をか？なんでだ？？」
「確かめたいの」
言うなり、粗末な草履を履いた、色白の足が、精霊廷内に踏み込んだ。

「おい！あぶね・・・」
そう言おうとした児丹坊は、驚きのあまり言葉を止めた。
伸ばした手のひらが、何か透明な壁のようなものに突き当たり・・・
次の瞬間、「壁」がふぅっと消え去るのが、見えたからだ。

――　あれは、精霊廷の結界か？
精霊廷に認められた死神以外がその結界を通り抜けることは、絶対

にできない。
通り抜けようとすれば拒まれ、自動的に精霊壁といわれる壁が、天から降ってくるはずだった。
しかし・・・
児丹坊は、雲ひとつ無い青空に目をやって、ぽかんとする。
そして視線を再び戻したときには、その姿はもうどこにもなかった。

１１．　印刷所前の攻防

「あ・・・ありがとうッしたー！！」
店員の、裏返った声に送り出され、日番谷は店を後にした。
隊長の自分が、いきなりこんな所で買い物したら、店員が動揺してもおかしくない気はする。
しかし、こちらも手段は選んでいられない。
日番谷は、チラリを店の看板を見た。
「駄菓子屋・みかん」
――　さて。そろそろ辿り着くころか・・・
一番隊の方角に目をやると、日番谷はタッと地を蹴った。

一番隊と、二番隊の中心には、建物が二つある。
一番隊に近いほうには、精霊廷通信を初めとする本類を扱う、印刷所。
二番隊に近いほうには、最近新しく作られた、露天風呂を含む異常に豪華な温泉施設。
やたら相性の悪いこの二施設、後参者は、一ヶ月前にオープンしたばかりの温泉のほう。

――　「ここでないと、湯が出なかったのだ」
砂蜂の一言により、強引に工事が推し進められたと言われている。
なぜいきなり温泉を掘らねばならないのか、理由は一切謎のまま、温泉は完成してしまった。
そして、そこには夜といわず昼といわず、温泉好きのかつての二番隊隊長が入り浸っている、という噂も。

そして、その印刷所の前では、ハラハラしながら原稿を待つ、檜佐木の姿があった。
印刷所の玄関の周りには、マラソンコースのゴールよろしく、多くの女性死神たちでひしめいている。
「まだかしら・・・」
「まさか、取り返されたとか！」
「大丈夫よ！女性死神協会ががんばってたもの！朽木家の前で」

朽木家の前で・・・その言葉に、檜佐木の背中に、スーッと汗が流れ落ちる。
次、朽木白哉にあったら、視線だけでにらみ殺されそうな気がする。
それだけではない。
隣の隊の長、山本総隊長がこの事態に気づくのは時間の問題だ。
その時、どうやって言い訳するか？
馬鹿正直に説明しようものなら、総隊長の前に、まず日番谷に殺される。

1. 白哉に殺される
2. 山本総隊長に殺される
3. 日番谷に殺される

おぉ・・・結局どれも先行きは一緒じゃねえか！
檜佐木が絶望した、その時だった。

「檜佐木副隊長！一体これは・・・」
女性死神達にもみくちゃにされながら、細身で金髪の男が現れた。
「おぉ、吉良・・・」
檜佐木は、まるで敵陣の中に唯一味方が現れたかのように、あからさまにほっとした表情を浮かべた。

「それが・・・話せば長く、もないか・・・」
こそこそと耳打ちする男二人。

「はぁ？それで、日番谷隊長ご本人の意向は全くの無視で、袋とじを作ったんですか？」
よくもそんな度胸のあることを、と絶句する吉良の方を、檜佐木は小突いた。
「そう言うな。隊長には申し訳ないが、これが予算削減に苦しむ精霊廷通信と女性死神協会を一度に救う、切り札になりうるんだ」
「まぁ・・・それはそうみたいですが」
吉良は、周囲に満員電車のようにひしめき合う、女性死神たちを見下ろしてため息をつく。

「大体どうして、そこまで予算が・・・」
そこまで言いかけて、吉良は口をつぐんだ。
檜佐木は後輩の顔を、ため息混じりに見やる。
「お前に分からねえとは、言わせねえぞ・・・」

予算削減の原因は言うまでもない、３ヶ月前の、藍染・市丸・東仙による反乱にあった。
壊れた建物の修復だけでも、精霊廷には通常の何倍もの予算を注ぎ込んでいる。
自然と、他に振り分けられるはずだった予算が減ってしまうのも、仕方がないことといえた。
特に、市丸と東仙の元にいた二人にとっては、いづらいことこの上ない。

「しょうがない、ですか」
不景気な顔を見合わせ、二人はため息をついた。
「けどまぁ、みな楽しそうですし」

無理やりにフォローを入れようとする、先輩思いの吉良なのだった。
――　ただ一人を除いて、だけど。
「そうだ。そうだよな。皆ここの所沈んでたから、イベントが必要なんだ！そうに違いない」
こくこく、と檜佐木はうなずく。
――　そう、俺が悪いわけじゃない！
あくまで精霊廷のため、精霊廷のため・・・と罪悪感をかみ殺した。

その時。遠くから子供の声が響いた。
「ひさしゅー！」
ひさしゅう？
檜佐木が声の主を探ると、温泉の屋根に取り付けられた巨大な煙突の上に、小さな影があった。
「俺か？」
檜佐木が自分を指差すと、煙突の上にしゃがみこんでいたやちるは、なぜ自分の名前を知らないんだ、という顔をした。
「ひさぎしゅーへいだから、ひさしゅーでしょ！」
でしょ！と言われても知らない。

「あのなぁ・・・て、そんなことはどうでもいい！原稿は！」
「あるよー！あたしがトリだって、みんなが」
やちるは、手に持ったＳＤカードを、檜佐木のほうに示して見せた。
結局いろんな女死神の手を渡り歩いたカードだったが、すばしっこさでは随一のやちるに、最後は託されたものであろう。

「わかった！わかったから、そーっと、こっそり、こっち来い！」
こんな場面を日番谷に見られたら・・・と思うと、ゾッとした。
とっとと大量生産してしまうに限る。
「こっそり、か」
「そうそう。こっそり・・・」

背後からの声に、檜佐木は何気なく返事して・・・ビシリと背筋を硬くした。
この声は。
「日番谷・・・隊長・・・」
「あとで殺す」
物騒な言葉を吐き、日番谷の気配が、その場からふっと消えた。

「おー！ひっつん！！」
「日番谷隊長だわ！あんなところに！」
女性死神たちがざわめいた。
温泉施設の屋根の上に、日番谷の姿があった。
煙突の上にしゃがんだやちるを、まぶしそうに見上げる。

「ひっつんも、けっこうしぶといねー！」
「うっせえ」
「鬼ごっこしようよ！鬼ごっこ」
檜佐木のあせりも、やんやと騒ぐ女性死神にも目をくれず、やちるは楽しそうだ。
「もういい、疲れた」
日番谷はそう返すと、懐に手を入れた。
「これ、やるよ」
そう言うと同時に、日番谷の懐から、小さな袋がこぼれたように見えた。

「お？」
やちるの目が、露天風呂のほうに落ちてゆく、袋のほうに向けられる。
「こ・・・こんぺいとう！！」
キラーン、とその目が輝いた。
と同時に、その体が真下にダイブする。

それを見守る檜佐木や女性死神たちには、温泉施設内に消えたやちるの姿は見えない。
「とったぁ！」
声だけが、聞こえた。その直後、
ばっしゃーん！！
あたりに木霊した、大きな水音も。
「・・・え」
檜佐木の顔が引きつる。
その檜佐木を、日番谷が見下ろした。
心なしか、いつもの無表情が勝ち誇っているように見えた。

「湯に沈んだぞ、カード」
一瞬の、沈黙の後。
周囲は、悲鳴に包まれた。

１２．　女がいない処へ…

日番谷は、湯煙でまったく見えない露天風呂の内部に、ふわりと飛び降りた。
「おい、草鹿？」
こんぺいとうを追ったやちるが、湯船に飛び込んだのは間違いないはずだ。
湯に沈めば、ほぼ１００％おしゃかになっているはずだが、カードの行く末だけは、確認しておきたかった。

「・・・多勢に無勢の状況で、大したもんじゃ」
湯煙の中で、日番谷の背中にかけられたのは、女の声。
ぴたり、と日番谷が動きを止める。
――　考えてなかったけど・・・ここ、女湯か？
「この露天風呂には、女湯しかない！」
日番谷の心の声を読み取ったかのように、女が続けた。
女にしては低いが、やけに艶っぽい声をしている。
――　にしても女湯だけなんて、そんな理不尽な湯があるのか？
「おぬしも分からん奴じゃのう。この露天風呂は、砂蜂がワシのために作ったものじゃからの」
あぁ。
日番谷は、すべてを了解した。
後ろにいる人物が誰なのかも。
「・・・四楓院夜一」
「正解じゃ」
其の姿を見なくても、ニヤリと笑っているのが、分かるような声だった。

「カードはここじゃ！」
ピン、と日番谷の背中に何かがあたり、反射的に掴み取ると・・・
それは、あのＳＤカードだった。
湯に濡れ、確実にダメになっているのが、ぱっと見てわかった。
思わず振り返ると、褐色の肌が目に入った。
「まぁここは女湯じゃが、お主の外見年齢なら、許されんでもない」
湯煙の向こうで、岩の上に胡坐をかいた、女の姿が見えた。ただし・・・全裸で。

日番谷には、たとえ子供だと言われようが、女の裸に興奮する趣味はない。
夜一には、男に悲鳴を上げられようがのけぞられようが、男に裸を見られて恥ずかしい、というような羞恥心は持ち合わせていない。
「・・・」
自然と、無言で見つめあうことになる。

「ただし」
ニヤリ、と夜一がそれは嬉しそうに笑った。
初対面にも関わらず、嫌な予感が日番谷の背筋をはしった。
「湯船で服を着たままなのは、いただけんなぁ・・・」
「あたし脱いだよ！」
やちるの無邪気な声に、日番谷はちらり、と振り返る。

そこで気づいたのだが、湯船にいる女は、一人や二人じゃない。
その視線が、全部自分に集まっていることに気づいて、日番谷は冷や汗をかいた。
「わかった。今すぐ出てく」
両手を挙げて、一歩下がった日番谷は、その視線の先に、夜一がいないのに気づく。

「『残念なことに』この写真はダメになってしまったからの。代わりの写真が必要じゃ」
がしっ、と、背後から夜一の手が日番谷の肩をつかんだ。
いつもなら素早く反応するところだが・・・熱気にやられたのか、とっさに体が動かない。
「ホンモノの『袋とじ』を作り直さねばな」
「・・・は」
「引っぺがせ！！」
「○○×△☆☆・・・！」
文句も、抗議も、悲鳴すら上げることができず。
日番谷の体は、四方八方から伸びてきた手によって、後ろから湯船に沈んだ。

「な・・・何が起こってるんだ・・・」
ドッタンバッタン、と音が響いてくる露天風呂を外から見守りながら、檜佐木と吉良は呆然とつぶやいた。
恐ろしくて、様子を見に行く気などまるでない。
その横を、たたた、と全力で走ってゆく姿が、一人。
「ん？見ないな、あの子・・・」
二人が、顔を見合わせ、その小さな背中を目で追った。

「カメラＯＫ！」
裸のまま、悠々とカメラを構えた夜一が、日番谷に照準を合わせようとした、その時。
「待って！！！」
異質な声が、露天風呂中を貫いた。
「・・・ん？」
さすがの夜一も、その大声に動きを止めた。

明らかに子供と分かる、あどけない声。しかし、妙に声に貫禄がこもっている。
たたっ、と露天風呂の中に走りこんできた、その小さな姿に、夜一は振り返った。
髪を耳の横で二つに分けて結んだ、年のころ４歳くらいの少女だった。
白い顔は、走ってきたせいか紅潮している。
驚くほど大きな、黒目がちの眼が、まっすぐに夜一を見返していた。
その古びた草履、桃色のところどころ擦り切れた単衣。
こぎれいに着飾っている、精霊廷の貴族の子女ではないことは明らかだ。
――　流魂街の子供か？一体、どうやって入り込んだ・・・？
そして、なにより夜一を驚かせたのは、その少女が自然とまとった、霊圧だった。
――　この娘。

「げほっ！ごほごほっ・・・」
女たちの手を払いのけ、日番谷がその隙に湯の中から半身を起こした。
「シロにーちゃん！」
とたん、弾けるように少女が走り出した。
湯船の中にざぶざぶと分け入り、日番谷に向かう。

「お前・・・澪？なんでこんなトコに・・・」
はだけた着物を直し、日番谷が立ち上がろうとした時。
くらり、と視界が揺れ、日番谷はよろめいた。
その額に、小さな手のひらが置かれる。
ずっと走ってきて温まっているはずのその手は、やたらヒンヤリとして心地よかった。

「やっぱり・・・」
澪は、日番谷の額に手のひらを置くなり、慌てて立ち上がった。
「ひどい熱！お医者さんを呼んで！」
熱？
その言葉は、日番谷にはひどく意外に聞こえた。

あぁ、でも確かに。
隊首会をうっかり失念したり。
食欲がなかったり、急にふらついたり。
普段とは、いろいろ違ったような気が、せんでもない。
そこまで、考えたとき。

「おにーちゃん！」
「日番谷隊長っ！？」
どうやら本格的に倒れかけたらしい。
伸びてきた手が自分を支えるのを感じたが、誰なのかはもう分からない。
意識が混濁する・・・
「苦しいですか？どこか、涼しいところに・・・」
誰かの声が、遠くに聞こえてくる。日番谷は、意識を手放す瞬間、こういった。
「女がいねーところに頼む・・・」

ーーーーーーーーーー
「澪」は、「女難1」とかに出てきてる当家のみのキャラです。

13．　日番谷隊長の女難・顛末

額に、ヒンヤリとした感触を感じる。
風が吹き抜け、サワサワと木の葉が揺れる音が耳に届く。
土のにおい、通りから聞こえる子供たちの歓声。
自分が、潤林安にいることは、うつらうつらしていても、この空気で分かった。
隣で、かすかに寝息が聞こえる。まだ子供のものだ。
――　澪か。
俺の看病をしてるうちに、眠ってしまったんだろう。
ただでさえ風邪っ引きの傍にいるんだ、寝ちまうとミイラ取りがミイラになるぞ。
声をかけようとしたが、意識がまた、水面下に沈んでいく。
春眠暁を覚えず、というが。この心地よさに抗えない。
ふと、一週間前の映像が頭を横切っていった。

――　「おい、澪。いつまで写真撮ってんだよ？」
氷輪丸の霊圧で凍りついた氷原の写真を、あちこち撮っている澪に、俺は声をかけた。
その熱心ぶりに、俺はまた地面に仰向けに寝転がり、澪の動きを目で追っていた。
地面の氷は冷たいはずだが、火照った背中に心地いい。

澪の写真好きは、今に始まったことじゃない。
実家に遊びに来た松本に、ねだって借りてからというもの、写真熱が一気に高まっている。
たまに、びっくりするほど感性のいいものを撮っていたりするから、俺も実は楽しみにしていた。
「んー。もうちょっとだけ！」

ニッコリ笑ってそう言われると、時間がない俺としても折れざるを得ない。
澪は、カメラのファインダーを覗きこんだまま、おぼつかない足取りでこちらに歩いてきた。
「おい澪、転ぶぞ」
「だいじょうぶー！」
肩に足が触れそうになるまで近寄ってきた澪は、パシャ！と俺の眼前で写真を撮り・・・
「えっ？」
同時に声をあげて、パッとカメラを除け、直に俺の顔を覗き込んだ。

「どうしたの？泣いてるよ？顔真っ赤だし」
「えっ？」
俺はとっさに、顔に手をやった。
「ねぇシロにーちゃん！絶対熱あるよ！お医者さん行こ？」
確かに、全身が火照ってる。吐く息からして、いつもより熱い。
瞼が熱いから、若干涙目になってるかもしれない。

原因は、腐るほど思い当たった。
反乱により、隊長が3人も抜けたことによる、純粋な業務量の増加。
加えて、いつか攻め込んでくる藍染たちの対策。
俺自身の卍解の修行に、部下への直稽古。
一日何時間働いてるのか、自分でももう分からない。
前に飯を食ったのは1日前、寝たのは2日前・・・という具合だった。

「だいじょうぶだ」
俺は、額に手をやろうとする澪の手を押し返し、上半身を起こした。
大丈夫じゃないのは分かってるが、だからってこんな大事なときに寝込むわけにはいかない。

だが澪は、心配そうな目でこちらを覗き込んだままだ。
「修行の後は、いつもこうなるんだよ。すぐに元に戻る」
しょうがなく、嘘をついた。
疑うことをしらない澪は、不安そうではあるが、一応納得したらしく一度うなずいた。

――　あー、そうか・・・
写真撮られたことなんて、すっかり忘れていたが。
アレ、だったのか。
キスの一秒前、なんて大層な名前つけやがって。
ただの風邪っ引きの写真じゃねえか。
しかしアレが、一体どうやって松本の手に渡ったのか、それだけが分からねぇ。
考えがまとまらねぇ・・・モヤモヤ、とその場の画像が乱れてゆく。
また、取り留めのない夢に飲み込まれそうになったとき・・・
突然、目の前ににゅっと松本の頭が現れた。カメラを構え、満面の笑みを浮かべている。
「隊長の寝込み写真、ゲットぉ！！」

「隊長！日番谷隊長！！」
覚えのある声が、何度も何度も俺の名前を呼んでいた。
「ハッ？」
それが夢じゃない、と自覚した直後、日番谷は目を開けた。
見慣れた栗色の髪が、日番谷の目の前で揺れた。
城崎尊の大きな目が、日番谷を心配そうに見下ろしていた。
「うなされてましたよ。だいじょう・・」
「松本はっ？」
「へ？おられませんよ？」
「何だ、今寝込み写真がどうとかって声が聞こえたような・・・」
それは幻聴です。

夢の中でも乱菊に苛まれているとは・・・尊はつくづく日番谷を気の毒に思った。
「隊長、だいじょうぶです。
松本副隊長はここに来たがってましたが、絶対！！来ないでくださいって百回くらい言っときましたから！」
「アイツは害虫か・・・」
そうつぶやく日番谷だが、決して連れてきてくれとは言わないのだった。

「まだ、熱も完全には下がってません。ゆっくりしててください」
氷水を入れた洗面器に浸したタオルをぎゅっと絞ると、日番谷の額に乗せていたタオルと交換する。
「・・・悪ぃな」
どれくらい前から日番谷を看病していたのだろう。
尊の手のひらは、両方真っ赤に染まっていた。
それを聞いた尊は、ぱぁっと顔を輝かせて上半身を起こす。
「い！いえ！！隊長のお役に立てるなら・・・」
そこまで言って、その上半身がコテン、と急に畳に倒れた。
「オイ！城崎？」
「あ、足痺れた・・・」
せっかく、ちょっといいことを言うつもりだったのに。
「・・・ふっ」
涙目で足を押さえていた尊は、その声に顔を上げる。
――　わ・・・笑ってる？
我慢できなくなった、みたいに。
いつもの眉間の皺もどこへやら、日番谷はぷっと吹き出した。
寝巻き姿で、すんなりした銀色の髪を下ろした日番谷は、いつもの死覇装に隊首羽織姿と同一人物とは、間違っても思えない。
尊はその瞬間、豚が空を飛んだのを目撃したような顔をしたのだろう。

「・・・何だ？」
怪訝そうな顔をして日番谷に、ぶんぶんと顔を振った。
役得・・・！と心中ぐっと拳を握っていましたなんて言えない。

「・・・澪」
布団の隅に頭を載っけて、すうすう眠り込んでいる澪に気づいた日番谷が、肘を立てて腹ばいに起き上がる。
背中にかけられていた上着を直してやる姿は、どこからみても兄と妹に見えた。
「ずっと、目が覚めるまで起きてるってがんばったんですよ？」
「・・・そうか」
知らなかった、と思う。
これほど、日番谷に柔らかな声が出せるなんて。
しかし。
「何だこりゃ！！」
突然声を荒げた日番谷が、布団をがばっとめくった。

「あ、それは・・・」
布団の端から覗いていたのは、４月の精霊廷通信。つい２日前に発売されたものだ。
キャッチコピーが一部分見えたが、見えていた文字が悪かった。
――　大興奮袋とじ♪
バッ、とそれを布団の端から引き出すと、日番谷はあわててページを繰った。
そして、封がすでに切られた「袋とじ」の中身を引き出した直後・・・
脱力した。
「なんだ、こりゃ・・・」
そこにあったのは。
白い髭が艶々しい、山本総隊長の姿だった。

更に言うと、上半身裸の。キメキメの格好の。
古傷だらけの、年齢が信じられないほどの鍛え上げられた肉体は、
確かに驚嘆ものだが。
この企画でそういうモノは、期待されて無いように思う。

「ワシが日番谷隊長の代わりに出る！て総隊長が言うもんだから、
誰も止められなくて」
「俺の代わり・・・」
日番谷は、別の意味で冷や汗をかいた。
「総隊長も知ってるのか？」
「とーぜんですよ。騒いでた印刷所、一番隊の隣だし」
「で・・・総隊長は何か言ってたか？」
恐れていたことが・・・日番谷は心中がっくりと肩を落とす。
しかし、尊が返してきた言葉は、日番谷にとっては全く意外なもの
だった。

「不問、だそうですよ。隊長が倒れた後、勤務状況が調べられたそ
うです。
隊長、一日２０時間以上働いてたって本当ですか？」
「２０時間？」
枕に頭を戻し、日番谷は鸚鵡返しに聞き返した。
しばらく考え込み・・・ぽつりと言った。
「そうかもしれない」
はぁ、と尊がため息をつく。
おそらく、他の皆のために、寝食も忘れて働き続けていたのだろう、
この勤勉すぎる隊長は。

「総隊長からの指示が出てます。『２週間は安静にすること』だそ
うです」
「気遣いはありがたいがな・・・隊舎に戻る」

日番谷はため息をつき、上半身を起こした。
ふらり、と体を揺らしながらも、起き上がろうとする。
「ダメです、ダメダメ！」
慌てて尊がその肩を抑えようとするが、病んでも隊長、とてもじゃないが止められない。
「ダメですよ、働こうなんて考えたら！副隊長が何とか・・・」
そこまで考えて、尊は視線をあさっての方向にそらした。
何とか・・・しているとは、思えなかった。

「だ、大丈夫ですよ。
いくらなんでも、隊首室の戸を開けたら、中に詰まってた書類があふれ出てる、なんてことは・・・」
「ないのか？」
「えーと、えーと・・・」
日番谷と尊が頭をかかえた時。
「おぬし、切れ者だと聞いていたが・・・女に関しては、まだまだじゃの」
低めだが、すぐに女だと分かる艶っぽい声が聞こえた。

「何者！」
バッ、と体を起こした尊を、日番谷は制する。
「四楓院夜一か・・・」
「え？」
尊は、声がした縁側のほうを見やった。
死神として経験が浅い尊でも、四楓院家の当主、夜一の名前くらいは知っている。
いつの間に現れたのか、ごろりと縁側に横になっている姿は、まるで猫のように気ままで自由だ。
部屋から縁側を見た二人を見返すと、ニィ、と頬に笑みを浮かべた。

「そんな無粋を言っている間はな」
「あ？何を・・」
「そういえば、その精霊廷通信。
お主の『華麗なる結晶』は、割とワシも好きなんだかな。
今週は休載らしいな、残念じゃ」
その声に、たぶんに悪戯っぽい響き・・・悪く言えばＳっ気がこもっている。
――　ん？
一抹の嫌な予感にとらわれ、日番谷はぺらぺらと精霊廷通信をめくる。

「日番谷冬獅郎の『華麗なる結晶』休載のお知らせ」
そのページの真ん中には、流魂街のどことも知れない通りに立つ日番谷の後姿があった。
刀を背負ったその姿は、隊長の風格を漂わせた中々の一枚だ。
しかし。
その上に書かれたキャッチが問題だった。
『女のいない処へ』
「そのページ、受けがいいらしくてな。
精霊廷では子供から大人まで『女のいない処へ』のキャッチフレーズが大流行じゃ。
今出廷すればトキの人じゃぞ」
「ちょっと、黙っててくれ」
日番谷が頭を抱えた。本気で頭が痛い。

「安心するがよい。十番隊隊長の代理は、砂蜂がこなしておる。
さっき見てきたが、特に問題はないようじゃ」
「ちょっと待て。砂蜂、て言ったか？」
おおよそ、進んで自分をフォローしてくれるとは思えない名だ。
こないだだって、「茶番だ」とか言って、やたらと怒っていたよう

だったが・・・
――　茶番？
「気づいたかの」
夜一は、上半身を起こすと、日番谷に向き直った。

「おかしいよのぉ。なんで砂蜂がそんなに手際よくお主のフォローをするのか。
そして、総隊長がお主の勤怠状況をすぐに把握できたのも変じゃろ。
・・・誰かが事前に手をまわしでもしない限りはな」
・・・さっぱりわかんない。
尊は、つかの間鋭い目を向けた夜一の顔を見て、そして日番谷に視線を戻した。
日番谷の横顔は、まだ熱で上気しているが、それでも考えている。
迷っているというより、答えを見つけたけども、その答えが信じられない。そんな表情だ。

「・・・松本か？」
ちょっと眉間に皺を寄せ、夜一を見つめ返す日番谷の表情は、尊には見慣れないものだった。
「え・・・あの、いつもぐうたら寝てて、お菓子と酒ばっかり好きで働かなくて、今回の騒動の元凶を作ったあの副隊長が？」
「・・・よどみないのう」
立石に水、のようにスラスラと文句を並べ立てた尊を、夜一があきれたように見返した。

「まぁ、乱菊も困ったじゃろうな」
夜一の目に、悪戯っぽい光が戻っている。
「お主は、体調の悪さを指摘されたところで、素直に聞くタマじゃない。
そんな時に、そこの澪が持ち込んだ写真はちょうど良かったという

ことじゃろう」
「じゃ、副隊長は、その写真見て・・・」
「キスの一秒前なんて、茶目っ気出しおって。
澪は言ったらしいぞ。シロにーちゃんを助けて、と」

日番谷は、無邪気な顔をして眠り続ける、澪を凝視した。
乱菊からも、澪からも、完全に隠し通したと思っていたが。
この2人の女のほうが、自分よりも上手だったか。

おそらく、しんみりした空気は、夜一の性には合わないのだろう。
パンパン、と手をたたき、縁側から立ち上がると日番谷を見下ろした。
「ま、乱菊のことじゃ。
単に騒ぎたかっただけかもしれんし、酒代を稼ぎたかったのかもしれんな。
しかしお主も、結果として休めたのだからいいではないか！
総隊長の指示がなければ、二週間も休むお主じゃなかろう」
言うべきことは言った、というせいせいした顔で、夜一は2人に背中を向けた。
去り際に、ふと思い出したように日番谷を振り返る。
「次こそは、ホンモノのいかがわしい写真で話題をさらうような男になれよ」
真顔で言うのが、夜一の人が悪いところだ。
「うるせえ・・・」
案の定、日番谷は苦虫を噛み潰したような声で返事をした。
フッと表情を緩めた夜一の姿が、消える。

「・・・城崎」
ぽつり、と日番谷がつぶやいた声に、尊は顔を上げた。
「松本を呼んでくれ」

いつもだったら、他の女を呼ばれたら、ヤダって思うんだけど。
今回ばっかりは、いいか。
「はいっ！」
尊は、満面の笑みでうなずくと、勢いよく立ち上がった。

それから、潤林安の日番谷邸は、しばらくの間、暖かな静寂に包まれていた。
突然怒鳴り声が、響き渡るまでは。
「寝込み画像ゲットーー！！」
「松本、てめえぇぇ！！」

日番谷隊長の女難２　完

Ｓｐｅｃｉａｌ　Ｔｈａｎｋｓ！
鰹女さま
犬夜叉さま
ネタ提供、ありがとうございました。
きっと書いてる私が一番楽しんでました♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0703e/

日番谷隊長の女難２

2010年10月9日01時51分発行